

東川米「ゆめぴりか」最高金賞に輝く



昨年11月27日、札幌市にて全道対象の「ゆめぴりかコンテスト2019」が行われ、JAひがしかわの「東川米ゆめぴりか」が令和最初の最高金賞を受賞しました。

東川米が最高金賞を受賞するのは今回が初。同コンテストは第4回目で、産地間で競うことによるおいしさやブランド力の向上を目指しています。今回はJAようてい蘭越と史上初の2地区同時受賞となりました。

同月29日に東川町農協の樽井功組合長、東川町稲作研究会の畑中雅晴会長らが松岡市郎町長を訪問し、受賞結果を報告。畑中会長は「このコンテストは成分数値で判断せず、実際に食べておいしい米を選ぶ。粘り、つや、甘み、歯ごたえのバランスが良いと評価されたのは131人の生産者が一生懸命頑張った結果。受賞米は最高金賞シール付きでホクレンショップやミルクランド北海道（東京のアンテナショップ）、Amazon（ネット通販）で販売され、より多くの人に認知される。これを機に町の活性化を含めてさらに頑張りたい」と話しました。



（※）リサイクル留学生プロジェクトは、東川町&大崎町のふるさと納税を活用した取り組み。昨年11月30日に決定した「ふるさとチョイスアワード2019」にて、「ふるさとチョイスアワード部門」の部門大賞を受賞しました！同プロジェクトは、東川町立日本語学校で日本語を学んだ留学生が、リサイクル率日本一の大崎町でその技術を学び、自国へ知識を持ち帰ることで、世界のゴミ問題解決を目指すもの。北と南の2つの町の「協創と協働」が、世界の未来につながると評価されました。

松岡市郎町長は「年々磨きをかけ、ついに最高位に至ったのは生産者と農協の尽力の賜物。東川米が第三者から最高だと評価され、町としてもうれしい」とコメント。

この受賞を記念し、JAひがしかわから町にゆめぴりか2019kgを贈呈いただきました。松岡町長は「学校給食での活用や、町民のみなさんに味わっていただける機会を検討したい」と話し、昨年12月28日・29日にはせんとびゅあⅠにて町民限定で無料の食イベント「東川米ゆめぴりか大感謝祭」を開催。リサイクル留学生プロジェクト（※）などで協力している鹿児島県大崎町産のうなぎの蒲焼とともに、町自慢の「東川米ゆめぴりか」のおいしさを味わいました。

みなさんにとって東川で暮らす、JTBって？

— 東川スタイルマガジンをつむいで街を盛り上げる —

昨年12月14日にせんとびゅあⅡで行った第56回デザインスクールは、東川スタイルマガジン創刊号で紹介された高倉直樹氏（Ⅰ区、農業経営者）、大村麻衣子氏（南町1、パバンティ）、松家孝志氏（Ⅰ区西町、松匠）、奥田貴氏（東倉沼、写真家）、小岩昭市氏（同、小岩組）、早見賢二氏（同、ズビヤク）との対話形式。

東川スタイルとは、東川らしい感覚のこと。特別なことではなく、みなさんが言葉にせずとも自然にしていることを意味します。副題のMAKERS（メイカーズ）は、自然や人と影響し合いながら自分らしく生きる中で、何かをつくる人たちのこと。このマガジンは、その人が東川でやり続けてきたことを考えていることを伝え「らしさ」が積み重なって形作られてきた、人と人の間に生まれるこの町の文化を知るきっかけを作ろう、ということを目的としています。

あなたにとって東川とは—

「日本人は田んぼをみると心が落ち着く。そんな田んぼの真ん中にあるカフェに来たお客さんが、大雪山を眺めてから店内に入る姿を見て、この街



▲左から高倉氏、大村氏、松家氏、奥田氏、小岩氏、早見氏

の豊かさに気づいた」（高倉氏） 「同業者でもそれぞれの特色を理解して紹介しあえる、人のつながりを感じられる町」（大村氏）

あなたにとって豊かさとは—

「子どもに背中を見せつつ、生活の多くを自分で手掛け、自分なりの満足感の中から仕事を充実させていけること」（奥田氏） 「毎日鹿やリス、鳥が近くにいる、家の中を飛ぶトンボと孫が触れ合う生活」（早見氏）

Ⅰ区の優「まち」—

「多くの移住者が一歩先に接するものが建築業。東川に来て失敗したと言われないように、できるだけ生活におけるアドバイスをしている」（小岩氏） 「一人より、仲間という視点から考えた方が知恵が出る。困っていたらすぐ声をかけられる距離感でいられること」（松家氏）

それぞれの「東川観」を知ることのできる一人一人の「自分にとっての東川」が見えてくるのではないのでしょうか。マガジンは1月末まで町民限定で無料交換中、せんとびゅあⅡでは展覧会開催中です（27ページ参照）。